**聖霊降臨節第3主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2025年6月22日**

**「大歓迎」**

**ホセア書6章6節**

**6:6 わたしが喜ぶのは／愛であっていけにえではなく／神を知ることであって／焼き尽くす献げ物ではない。**

**フィリピの信徒への手紙2章19～30節**

 **2:19 さて、わたしはあなたがたの様子を知って力づけられたいので、間もなくテモテをそちらに遣わすことを、主イエスによって希望しています。**

 **2:20 テモテのようにわたしと同じ思いを抱いて、親身になってあなたがたのことを心にかけている者はほかにいないのです。**

 **2:21 他の人は皆、イエス・キリストのことではなく、自分のことを追い求めています。**

 **2:22 テモテが確かな人物であることはあなたがたが認めるところであり、息子が父に仕えるように、彼はわたしと共に福音に仕えました。**

 **2:23 そこで、わたしは自分のことの見通しがつきしだいすぐ、テモテを送りたいと願っています。**

 **2:24 わたし自身も間もなくそちらに行けるものと、主によって確信しています。**

 **2:25 ところでわたしは、エパフロディトをそちらに帰さねばならないと考えています。彼はわたしの兄弟、協力者、戦友であり、また、あなたがたの使者として、わたしの窮乏のとき奉仕者となってくれましたが、**

 **2:26 しきりにあなたがた一同と会いたがっており、自分の病気があなたがたに知られたことを心苦しく思っているからです。**

 **2:27 実際、彼はひん死の重病にかかりましたが、神は彼を憐れんでくださいました。彼だけでなく、わたしをも憐れんで、悲しみを重ねずに済むようにしてくださいました。**

 **2:28 そういうわけで、大急ぎで彼を送ります。あなたがたは再会を喜ぶでしょうし、わたしも悲しみが和らぐでしょう。**

 **2:29 だから、主に結ばれている者として大いに歓迎してください。そして、彼のような人々を敬いなさい。**

 **2:30 わたしに奉仕することであなたがたのできない分を果たそうと、彼はキリストの業に命をかけ、死ぬほどの目に遭ったのです。**

1.

**オリンピックなどの大きなスポーツの大会がありますと、選手の活躍が連日報道されます。金メダルを取ったとか銀メダルを取ったとか銅メダルを取ったとか、選手や関係者へのインタビューなどもされて大活躍の選手は一躍時の人となります。そのような活躍した選手が日本に帰国する際には空港に大勢の人やマスコミが溢れて選手を大歓迎します。「おめでとう」「よくやった」大きな拍手や花束で活躍した選手を歓迎して称えます。時には街中をパレードまでして選手を称えるのです。**

**そのように活躍できた選手がいる一方で、メダルが期待されながらも十分に力が発揮できなくて活躍できない選手も当然いるわけです。初戦で敗退したとか、競技中のアクシデントで怪我をして棄権しなければならなかったとか。体調を崩してしまって試合に出ることができない人もいるわけです。4年間このために頑張って来たのに、活躍できなかった本人が一番悔しくて歯がゆいでしょう。そのような活躍できなかった選手が帰国した際にはマスコミもあまり取り上げません。空港で出迎える人の数もやはり少なくて、選手は申し訳なさそうにうつむいていたり、時に悔し涙を流しながら帰国します。そんな選手の様子を見て特にインターネット上では「日本の恥だ」とか「のこのこと帰って来やがって」などと言った誹謗中傷が飛び交うのです。おおよそ歓迎とは程遠いその雰囲気は、活躍した選手に対してのものとは180度異なると言ってもいいでしょう。**

**スポーツの世界は結果が全てです。活躍出来たら称賛されて、活躍できなかったら叩かれてという世界です。選手はそのことは十分承知の上で競技をしているわけですが、できるかできないか、いいかえれば役に立つか立たないかで判断されるのは非常に厳しい世界であり、世間の厳しい価値判断であると思います。**

**新約聖書の中にヤコブの手紙というのがあります。そのヤコブの手紙2：2～4にこのように記されています（422頁）。**

**「あなたがたの集まりに、金の指輪をはめた立派な身なりの人が入って来、また、汚らしい服装の貧しい人も入って来るとします。**

 **その立派な身なりの人に特別に目を留めて、「あなたは、こちらの席にお掛けください」と言い、貧しい人には、「あなたは、そこに立っているか、わたしの足もとに座るかしていなさい」と言うなら、**

 **あなたがたは、自分たちの中で差別をし、誤った考えに基づいて判断を下したことになるのではありませんか。」**

**これは教会の中で人を分け隔てしてはならないという文脈で語られるのですが、立派な身なりの人を歓迎して貧しい身なりの人にはそっけない態度をとるというのは、教会の役に立ちそうな人、教会の中心となって伝道とか集会とか奉仕とか積極的にしてくれそうな人が来たら歓迎してチヤホヤして、教会の役に立ちそうにない人が来たら誰も話しかけずにまるで「もう来なくていいよ」というような態度を取ってしまうと言う、役に立つ人を歓迎して役に立たない人に冷たくする、それは教会もこの世の価値判断に支配されているところがあるのではないかということを私たちに警告していると理解することができると思うのです。教会ですら人を役に立つか立たないかで判断してしまっているのではないか、それは教会は決してそうであってはならないということです。この世の価値判断にならって人を役に立つか立たないかで判断してはならないということなのです。**

**本日私たちに与えられております聖書の箇所には「テモテとエパフロディトを送る」と子見出しが付けられています。パウロが愛するフィリピの教会にテモテとエパフロディトの二人をこれから送るということを記してある箇所です。**

**まずパウロはテモテについて記します。このテモテという人物はパウロが第二次伝道旅行が始まったばかりの時にリストラという町で出会った青年です。父親がギリシア人で母親がユダヤ人キリスト者であり、どうやらテモテのお祖母さんの代からのキリスト者であり、テモテ自身人々から非常に評判の良い人でした。パウロはそんなテモテをぜひ伝道旅行に連れて行きたいと願って彼に割礼を授けたことが使徒言行録16：1～に記されています。テモテはパウロの伝道旅行に同行してフィリピにも一緒に行っています。ですからフィリピの様子はよく知っているのです。**

**テモテがフィリピの様子に詳しいからパウロはテモテをフィリピに送るという理由もあったのかもしれませんが、21節に「他の人は皆、イエス・キリストのことではなく、自分のことを追い求めています。」とありますように、テモテは自分のことを追い求めない、自分の欲望を満たそうというのが行動の基準ではない、イエス・キリストを追い求めているのです。何をすればイエス様が喜んで下さるのか、何が主の御心か、常にイエス・キリストを中心に物事を考える人、キリストのために生きた人、それがテモテなのです。そのテモテは「息子が父に仕えるように、彼はわたしと共に福音に仕えた」のです。謙遜に従順に福音に仕えたのです。パウロと共に福音伝道のために仕えたのです。**

**テモテはいわばパウロの右腕のような人です。若くて非常に有能なで謙遜で従順な伝道者です。この有能なテモテが今自分がすぐには行けない代わりの使者としてふさわしい者として遣わすことを主イエスによって希望しているのです。自分の思いではない、主の御心だとパウロは考えているし確信しているのです。**

**25節からはエパフロディトについて記します。先週の説教でエパフロディトついて少し触れましたが、彼はパウロにローマに監禁されているパウロに献金を届ける為にフィリピの教会から遣わされた人物です。25節に「あながたの使者として、わたしの窮乏のとき奉仕者となってくれました」とも記されています。遠く離れたフィリピの町からローマまで大切な献金を届けるのですから、フィリピの教会の皆さんから信頼されて体力も気力も十分にある人物だったのでしょう。パウロに献金を届けて、じゃあ役目は終わりではなくて、「奉仕者となった」ということは、監禁されているパウロに仕える者となったのでしょうし、恐らくフィリピの教会の人たちもエパフロディトにパウロに一生懸命仕える働きを期待して祈りを持って送り出したと思われます。**

**30節には「わたしに奉仕することであなたがたのできない分を果たそうと、彼はキリストの業に命をかけ、死ぬほどの目に遭ったのです。」と記しています。エパフロディトは「キリストの業に命を懸けた」のです。「キリストの業」とは「イエス・キリストの愛の業」とまり「イエス様の十字架と復活の愛の業である福音」を宣べ伝えるために命を懸けたということだ思います。パウロが監禁されていて外に伝道ができない代わりに、外に積極的に伝道に出て行ってイエス・キリストの十字架と復活の福音を宣べ伝えたのです。イエス様が歩まれたように、彼も貧しい人や病や障害を抱え悩み苦しむ人のところに行って寄り添って愛の業に励んだのかもしれません。**

**そして、もしかしたらキリストの業に命を懸けたからこそ、ペストのような感染症にかかってしまって死の淵をさ迷ったのかもしれません。彼の病気は具体的にはわかりませんが、何かしら後遺症が残り十分な働きができなくなってしまったようです。さらにエパフロディトを苦しめたのが自分が瀕死の重病になってしまったことが愛するフィリピの教会に知られてしまったことです。「フィリピの教会の人たちに合わせる顔がない。でも帰りたい思いがある。」彼が苦しむ姿はパウロの心を痛めていたのです。**

**エパフロディトはパウロのもとで十分な働きができたのか、彼の役に立ったのかというと決して十分な働きはできなかったでしょう。志半ばで病を患い、キリストの業のためにこれ以上の働きができなくなってしまったのです。世間の価値判断ですと、パウロが「こんな役立たずはいらない。だから今すぐに送り返します。」とフィリピの教会に文句の手紙を書いても不思議ではなかったのです。でも決してパウロはそうは記さないのです。**

**25節でエパフロディトをパウロは「帰さねばならない」と記されています。この「帰す」と訳されている単語と19節の「テモテをそちらに遣わす」の「遣わす」と元は同じ単語なのです。どちらも「送る」とか「遣わす」という意味の言葉です。ですからパウロはテモテをフィリピの教会を「遣わす」、エパフロディトもフィリピの教会に「遣わす」のです。パウロにとって有能な役に立つテモテも、病気となりパウロにとっては役に立たない者となってしまったエパフロディトも同じように、分け隔てなくパウロが「遣わす」のです。フィリピの教会のために両者を同じように遣わすのです。役に立つとか役に立たないとかそんなことは関係ないのです。パウロは二人を分け隔てなく遣わすのです。そんな二人を同じように大歓迎してほしいのです。「よく来てくれた、よく帰って来てくれた」二人を同じように大歓迎してほしいのです。それはさらに言えば、テモテもエパフロディトもパウロが遣わしただけでなく、この二人は神様が教会に遣わした、神が遣わした者だと主にあって大歓迎してほしいのです。**

**役に立つ人を歓迎し、役に立たない人を歓迎しない、世間一般の価値判断だとそうなります。役に立つ人使える人は喜ばれます。でもパウロの価値判断はそこではないのです。キリストのためなのです。テモテはキリストを追い求めて生きる人でした。エパフロディトもキリストの業のために命を懸けた人でした。両者ともにキリストのために生きた人です。イエス・キリストの福音のために生きた人です。たとえテモテは十分な働きができたとしても、エパフロディトが十分な働きができなかったとしても、パウロはその結果は関係ありません。キリストのために生きる、言い換えるならばキリストの心を心として生きるその姿が大切な事なのです。役に立つとか役に立たないとかそんなことは関係ないのです。キリストのために生きる、キリストの心を心として生きるその信仰の姿が大切なのです。**

**だからこそパウロは教会に対してキリストのために生きる、キリストの心を心として生きる者は役に立つ役に立たない関係なく大歓迎してほしいのです。それはなによりも神様が私たちを役に立つ役に立たない、その結果を御覧になって、役に立ったものは歓迎するけれども役に立たないものは歓迎しないというお方ではないからです。この世で立派なキリスト者と呼ばれる人だけを天の御国に大歓迎して、この世でキリスト者として十分な歩みができなかった人は大歓迎しないのではないのです。たとえ、自分ではクリスチャン失格だなと思うような人でも神様は天の御国に大歓迎して下さるのです。**

**イエス様の十字架と復活を信じて、こんな罪深い私のためにイエス様が死んでくださったことを信じて受け入れて、自分なりにキリストのために生きるならば神様は良しとしてくださるのです。何も大きなことはできなくても、小さなキリスト者としてキリストのために地道な歩みをして、たとえその歩みが志半ばであきらめざるを得なかったとしても神様は役に立たないから駄目だとは言われないのです。私たちの人生の金メダルも銀メダルも銅メダルもなくても、初戦敗退のような人生だったとしても、私たちがイエス様の十字架と復活を信じて歩み、キリストのために生きるならば、神様は分け隔てなく天の御国に大歓迎して下さるのです。キリストのために生きることこそが大切な事なのです。**